

情報誌 掲載記事

センターからほど近いところにあるクッキー型の博物館 sacsac。

そこにあるクッキー型は、土偶や土器、世界の絵画など、クッキー型としてはめずらしい。原画の細かい部分が忠実に再現できる秘密は、3Dプリンターとのこと。

「世界の万物をクッキー型にして、いろんな人たちが、いろんなものを知ってもらうきっかけになれば」と活動する木山潤平さんに、お話をお伺いしました。

——活動をはじめたきっかけを教えてください。

学生時代からデザインをしていて、大学では彫刻を専攻して学んでいました。そのあとジュエリー会社に入って、最初は主に製造をやっていました。ものづくりに興味があって、売られているものを買うのもいいですが、やっぱり自分で作らないと見えてこない部分があるから、気軽にもものづくりを経験できるようなことができればいいなと思ったのがきっかけで、2014年にsacsacの活動を始めました。ちょうど、3Dプリンターやレーザーカッターが出始めている頃で、色々なものが作れるということで話題になったけど、日用品などを3Dプリンターで作るには、クオリティ的にもイマイチなところがあるんです。でも、“なにかを作るための道具”なら出来ると思い、色々試してみた中の一つが、クッキー型でした。初めはオーダーメイドしかやっていませんでしたが、イメージが湧きにくいところがあったので、ちょっとずつ自分でつくったものを販売していこうとなった時、せっかくだから、何かコンセプトを設けてやりたいと思い、「COOKIE CUTTER MUSEUM」という名前でスタートしました。

——具体的に、どんな活動をしていますか？

一週間に1～2種類くらいのペースで新しいモチーフを作って、所蔵していています。オーダーメイドの依頼も受けていて、基本的にオンラインでの依頼や購入が多いです。それ以外では、展覧会のミュージアムショップなどに、クッキー型を出展したりしています。例えば江戸東京博物館でやっていた縄文展の特設ミュージアムショップでは、縄文時代にまつわるクッキー型を、会場限定で作って出したりしました。

——型のデザインはご自身で描かれているのですか？

はい、デザインは僕がやっています。手を入れなくてもいいデザインもありますが、クッキー型としての強度をある程度持たせないといけないし、クッキー型としての使いやすさもあるし、求められる品質や強度などに準じて簡略化してデザインしています。

——活動をするうえで、こだわっているところや大切にしていることは？

大切に思っていることとして、300種類くらいになったタイミングから、カテゴリーをちゃんと決めなきゃと思いました。世界の万物を謳っているので、カテゴリーに抜けがないようにしなければならないと考えるとネガティブなカテゴリーにもぶつかります。例えば差別や軍事みたいなことは、クッキー型にするにはちょっと難しいような内容のものもありますが、そこを避けるのは博物館としては違うので、最近カテゴリーの手薄なところをできるだけ埋めるために積極的に作り始めています。例えば「AK-47」という銃のクッキー型があるんですが、軍事というカテゴリーのアイテムを埋める時、軍事というのは基本的に国に攻撃したり、国を守ったり、そのために人を殺したり、そういう場面で使われるカテゴリーで、ネガティブな情報になるから、僕らは積極的にそういうものを見ようとは思わない。日本は銃社会ではないから身近じゃないし、物騒なものだなと感じる人もいると思うんですが、クッキー型として発表することによって、「銃1つで多くの人々が亡くなっているという事に対してどうですか？」という問いかけみたいなものも、博物館としては今後やっていけないといけない。そろそろ、そういう段階なのかなと最近は思っています。だからそういう目線で作っていくと、売るために作るというよりも、伝えるためであるとか、知ってもらうための一つとしてやっています。

———今後の展望を教えてください。

クッキー型博物館としては、1000種類を目指しています。今は626種類くらいなので、まだやっと真ん中を超えたな、というところですね。クッキー型以外にも、3Dプリンターやレーザーカッターを使ってできることは色々あるんじゃないかなと思っているし、ハサミで簡単にオリジナル封筒が作れるワークショップも考えていたりして、ものづくりの楽しさを知る機会をつくっていきたいですね。

———貴重なお話、ありがとうございました。

【告知】

クッキー型の博物館 <https://sacsac.jp/>